

レイチェル・ヤング

「中国唐の時代における粟特の翻訳家たち - 忠誠心という問題」

要旨

言語は、人間の相互作用において不可欠である。多国籍企業と多文化の文脈において、その社会的機能は、翻訳を通じて非常に促進されている。翻訳は、異なる言語を話す人々によって表出される概念を橋渡ししている。そして、それは、話を聞いてもらい、情報を伝えられるという人々の権利を守ることによって、社会正義を増進させている。しかしながら、異なる言語を話す人々の間で社会正義を促進するという、翻訳の建設的な役割は、翻訳者が信用できるという前提に基づいている。しかし、翻訳は、個別の目的にかなった操作をされることもあり、それによって正義が損なわれることもある。本報告において私は、翻訳の純一性（integrity）が問題とされる国家間の政策において、標準的な古文書の形跡をもとに、トルコ語を話すウイグル族（744-839）と取引のあった、中国の唐王朝（618-907）のソグド人による翻訳には、バイアスがかけられていたという主張について語る。唐の宮廷での、ソグド人による翻訳の純一性して中国で疑いが増大したのは、ウイグルとの民族的・商業的な提携と深く関連していた。しかし、はたしてその疑いは、正当であったのか。あるいは中国人ではない翻訳者が、根拠のない告発に基づいて、不当に扱われていたのか。本報告は、唐後半期の中国政治における翻訳依頼者（patron）と翻訳者の両方の側から、「正義」を検証したい。

（訳：本岡大和）